

編集後記

コロナ感染症が、普通の学校生活にまで及ぶとは予想していませんでした。生活を大切にする自由学園初等部は大きな決断をしなければならぬ状況が起きました。

今、初等部創立100年を目指して、新しい教育、学校、授業、そして学校生活を創り出すスタートと捉えていきたいと思えます。既成の考え方、当たり前が当たり前なのか、と問い直すきっかけになる第25号となることを願います。

初等部 高橋 出

2020年度は自由学園にとって100年目の歩みを進める年であったと同時に、コロナ禍においても学びを継続できるよう、男子部、女子部では両部が協力してオンライン授業を始めた年となった。また美術展も感染症対策を行いつつ工夫を凝らしての開催となった。新カリキュラムへの移行を念頭に始まった探求、共生学の学びについては21年度以降に改めて振り返ることができるとよいと考えている。困難の中で工夫し学びを続けられたことに感謝したい。

男子部 内藤 優子

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、私達の社会活動は大きく制限された。中等科高等科では、2020年度の1学期は、オンラインや課題による授業体制になり、生徒や教師向けに、若い先生が中心となってICTの使い方のワークショップを開いてくれた。いろいろなところで保護者の方々の温かい協力があった。戸惑いながらも、生徒の学びを続ける工夫を模索した1年だったが、どうにか教育活動を続けられたことに感謝したい。その記録を記す年報第25号となった。

女子部 星住 リベカ

コロナ禍により、最高学部の学びも変容している。対応に追われる日々だが、コロナ禍における対応をまとめてみるなかで、できなかつたことにこそ、自由学園での学びの本質があるように感じた。両者のよいところを取り入れて模索していきたい。

最高学部 奈良忠寿